
真実の物語

麻未夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実の物語

【Nコード】

N3147P

【作者名】

麻未夢

【あらすじ】

海に落ちた王子様を助けた人魚。二人は互いに一目惚れをしてしまふ。人間界と人魚界で古来より伝えられてきた『人魚姫』の悲しくも美しい愛の物語。だが、人魚は『人魚姫』のような悲しい恋はしたくないと、王子を振り切り海へと帰っていった。そんな人魚を、姉人魚と海の魔女が説得するも聞き入れられず、この愛の物語は始まる前に終わるのかと思われたその頃、王子はある決意を胸に、地上の魔女の元を訪れていた。

「まあ、大変！」

ひどい嵐に見舞われた船から、一人の青年が大荒れの海の中へと落ちていく。それを見た一人の人魚は、大慌てでそこへ泳いでいき、海の底へと為す術無く落ちていく彼の身体を抱きとめて、そのまま近くの陸地へと彼を運んでやった。

浜辺に引き上げ、仰向けに寝かせた青年を見て、人魚は一目で恋に落ちた。

しかし、のんびりもしてられない。

気を失っている隙にさつさと逃げたそうと、青年に背を向け海に戻ろうとする人魚だったが、そこでタイミング良く目覚めた青年が慌てて人魚を呼び止める。

「待ってください、あなたは命の恩人です」

「大したことはしじゃないわ」

そう言って振り向いた人魚を見て、青年もまた一目で恋に落ちてしまった。

「私は、この国の王子です。そして、この国には人魚姫の古い言い伝えがあります。王子を助け、愛し、そして泡になって消えてしまった人魚姫の美しい愛の物語が」

「私の国にも人魚姫の言い伝えがあるわ。間抜けな人間の王子を助け、でも愛されず、そして泡になって消えてしまった人魚姫の悲しい物語がね」

人魚はそう言つと、海へ潜り、そのまま泳ぎ去ってしまった。

せめてもう一度、その姿を見せてくれるのではと、淡い期待を胸に浜辺に座り込み海をじつと見つめていた王子が、嵐の海に呑み込まれた王子を搜索中だった兵士たちに発見されるまでの、実に6時間。彼はずっとそこに静かに座り続け、海をただ見つめ続けていたのである。

そんな王子を見て不憫に思ったのが、海の魔女と人魚の姉たち。
「どうだろうね。何も引き替えにしないで良いから、人間の姿にな
って、あの王子の元へ行っておあげよ」

魔女が言つと、姉たちもまた「そうよ、そうよ」と人魚を追いつ
める。

「絶対に嫌。だって、人間の足を手に入れても、その足はまるでナ
イフで挟まれるように酷く痛むのでしょうか？」

「あの魔法は改良したから大丈夫だよ」

「あの王子に真実の愛が無ければ、私は泡になって消えてしまうわ
姉たちは、ならばと短剣を取り出した。

「あらかじめ、この短剣を持ってお行きなさい。そして、裏切られ
たらすぐにこの短剣で王子の心臓をえぐり、人魚に戻って海に帰っ
てくれば良いじゃないの」

「わざわざそんな事をするぐらいなら、私は人魚のまま、海で静か
に暮らすわ」

人魚はそう言い捨てると、魔女や姉たちに背を向けて遠くの海へ
と泳ぎ去ってしまう。

「まったく、人魚の名折れね。王子を助けて、王子に会いに行かな
いだなんて」

「だいたい、魔女さんが悪いのよ。あの時、人魚姫の声を奪ったり、
余計な苦痛を与えさえしなければ、あの子だってもっと素直になっ
た筈だわ」

「5代も前の魔女の仕打ちで私を責められても困るさね」

姉人魚たちに責められて、魔女は大きく溜息を吐いた。

「しかし、あの子の言うことにも一理はあるさ。なんだって、あの
子ばかりがリスクを背負って人間にならなきゃならないんだね」

魔女の言葉に、姉人魚たちは「それもそうね」と顔を見合わせる。
「王子が行動を起こしてはいけないなんて決まりは、どこにもない
んだよ」

「でも、王子が行動を起こすと言ったって、どうやって？」

姉人魚の疑問に、海の魔女は肩を竦めるだけで何も答えなかった。

一方、その頃、王子がどうしていたか――。

彼は一人、地上の魔女の元へと足を運んでいた。

「どうか私を海の中で暮らせるようにしてください」

「正気かね」

「正気です。思えば、あの人魚姫の話は我々の国では、純粹で美しい愛の物語として伝わっていますが、彼女ら人魚から見れば、せつかくの人魚姫の優しさと苦勞が、間抜けな王子のせいで、正に水の泡と化してしまった悲しい話なのです。それを承知の上で、彼女に地上に來いだなんて、あまりにも不誠実すぎました」

この地上の魔女は、現在の海の魔女同様に5代前の海の魔女の血筋であり、2代前に海から陸に上がった分家魔女の子孫である。

故に、王子の話は正直なところ、先祖のやらかした事で己が責められているようで、大変耳が痛かった。

「仕方ないね。良いだろう、お前さんの願いを叶えてやろう。だが、何も引き替えにする必要はないが、それでも常識的に考えて、お前さんは色んな物をこの地上に捨てていく必要があるよ」

「彼女のためなら、何だつて捨てていきます」

「まず、国を捨てなきゃならないだろう。両親や弟妹とも二度と会えない。当然、王子という身分は無くなる。立派な衣装も海では必要ない。その腰に提げた剣だって、海じゃ役立たずだ」

王子は一瞬、未だ壮健ながら、いずれは自分に国を任せて隠居して、のんびり暮らすはずだった父母の姿を思い浮かべたが、すぐにそれを振り払い大きく頷いた。

そんな王子に、地上の魔女は更に続けてこう言う。

「何より、全てを捨てて海に入ったお前さんを、あの人魚が愛してくれるとも限らない。あたしゃ、真実の愛が手に入らないからつて、お前さんを泡にしようだなんて思わないが、二度と人間の姿には戻せないよ。真実の愛が手には入らなきゃ、お前さんは一生を孤独の内に海の底で暮らす事になるだろう」

王子は、魔女の語る暗い未来に、わずかに眉を曇らせた。あの日の人魚の自分に対する対応を見る限り、そこに真実の愛があると信じられるほど、王子は楽天家ではなかったからだ。

だが、王子はそれでも大きく頷いた。

「お願いします。私を人魚にしてください」

「馬鹿ね」

その人魚の、人魚界では珍しい男の人魚を迎えての第一声がそれである。

「あなたを人間にするより、私が人魚になった方が早いでしょう」

元王子は、人魚の毒舌などまるで堪えていないように、鷹揚に笑いかえして、そう言った。

「全部、捨ててきたの？」

「ええ、両親に弟妹たち、身分、その他諸々の物を全部捨ててきました」

「本当に馬鹿ね」

呆れを含んだ声に、溜息が続く。岩陰に身を潜め、事の成り行きを見守る姉人魚たちと海の魔女は、二人をハラハラと心配げな眼差しで見つめるばかり。

そんな彼女らの視線を感じてか、人魚は、観念したように小さく笑った。

「真実の愛なんて物を、あなたにあげられるかどうかは解らないけれど、少なくとも私はあなたを孤独にはしないつもりよ」

「では、私はあなたと一緒にいても良いのですね」

「何も持たない人魚を追い返すほど、私の心は狭くはないの」

そう言っただけで出された手を、元王子はしっかりと握りしめ、二人は笑いながら泳ぎさっていく。

そんな彼らを岩陰から見送って、姉人魚の一人が溜息を吐いた。

「きつと地上では、人魚に誑かされて全てを失った気の毒な王子の物語が作られるわね」

それに対し、海の魔女はこう告げる。

「ならこちらは、要らない物を全部捨てて、真実の愛を手に入れた王子の物語を作ってやればいい。だがね、地上と海の中、そのどちらの物語がより真実に近いかは、あの二人だけにしか解らないのさ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3147p/>

真実の物語

2010年12月5日00時25分発行